



ぼくを変えてくれた友達

清水小学校 六年 堤 大河

その友達は、毎日元気な声でぼくに話しかけてくれた。気分が落ちこみそうな雨の日も委員会の仕事で忙しくて大変な日も、「ねえねえ、大河さん。」と、目の前にいるぼくに、まるで向こうの友達に話しかけるように元気な声で話しかけてくれた。席替で、ぼくの前にその友達が座ることになった。友達は、クルツとぼくの方を向いて、クスッと笑いたくなるようなことを何度も話してくれた。日にちが経つと、友達が後ろを向いただけで笑いがこみ上げてくるようになった。

「友達と笑い合える関係になると、助け合おうという気持ちも増えていくよ。だから、なるべく楽しくて明るい話をしよう」と決めていたよ。という言葉だった。明るくなるだけでなく、助け合う気持ちも増えていくなんて！そう聞いたぼくはすぐやつてみようと思った。でも、それはなかなか難しかった。だから、「友達に優しい言葉をたくさんかけよう。」と決め、それを現在実行中である。

【先生のコメント】
友達とのかかわりの中で、学ぶことはたくさんあります。その中の一つが「言葉の大切さ」です。大河さんは、友達のよさを感じ、自分もできることは何かを探っています。それが「優しい言葉をたくさんかけること」でしたね。小さな心がけで、友達の心を明るくしたり元気にしたりできることに気づいた大河さん。最後の方にあるように、今の苦しい状況を乗り越えられる特効薬は、二人一人の明るく優しい言葉なのかもしれませんね。

みんなの幸せ願って

いつの間にか、ぼくはその友達と一緒にいる時間が長くなった。すると周りの友達から「大河さん、最近よく笑うようになったね。」と言われることが増えた。自分では意識していなかったが、そう言われると何だかうれしくなった。

「友達と笑い合える関係になると、助け合おうという気持ちも増えていくよ。だから、なるべく楽しくて明るい話をしよう」と決めていたよ。という言葉だった。明るくなるだけでなく、助け合う気持ちも増えていくなんて！そう聞いたぼくはすぐやつてみようと思った。でも、それはなかなか難しかった。だから、「友達に優しい言葉をたくさんかけよう。」と決め、それを現在実行中である。

今、様々な制約があり、がまんしていることも多い。みんな大変な時期を過ごしている。そんな時だからこそ、人を明るい気持ちにさせる話や優しい言葉を増やしていきたい。そうすればきっと、それが助け合う気持ちにつながり、今の大変な状況をみんなで乗り越えることができるだろう。ぼくはそう信じている。



「田中羊羹本舗」3代目 原田 亜希子さん



長田鉱泉場の近くに、お客さんも猫も、近所の子どもたちも居心地よさそうに過ごすようかん屋がある。そこで今日も積極的にお客さんとコミュニケーションを交わす原田さんの姿があった。お客様に支えられて 父が体調を崩したのをきっかけに本格的にお店の手伝いを始めた原田さん。「父が戻ってくるまでようかんは一切作らないつもりだったんです。創業70年間作り続けてきたのに私の代でお客さんが離れていくことが怖かった」という。そんな中、「今日の調子はどげんね」と様子を見に来てる近所のお客さんや「買って食べるけん頑張って作らんね」との励ましの言葉をもらい、頑張つてやっといけばお客さんは離れていかないという

信につながった。3代目として後を継ぎ、お客さんに支えられた10年間はあつという間だったという。

地域の人たちに楽しんでほしい 地元では毎年夏の風物詩となっている田中羊羹本舗のかき氷。孫と来店したお客さん、近所の子どもも、鉱泉をくみに来たお客さんも、かき氷だったらみんなが気楽に楽しめるだろうと販売を始めた。「今まではお店についてこなかった孫が、かき氷が食べられるようになってからは近所の子まで誘つてついでくるようになった」と嬉しそうなお客さんの話や、「今年のかき氷はまだ？」

「もう僕半袖やけど」などお客さんとの駆け引きが嬉しくて楽しいと話してくれた。

昭和の雰囲気を残して 「地元で長く地味に続けていくことが理想です。物心ついた時から日常だった、店先で宿題をする子がいて、近況報告をしにくるお客さんがいて、お店もお客さんもお互いにコミュニケーションをとるような昭和の雰囲気を残していきたい。それが一番の広告になります」

80歳まで現役で働きたいと話す原田さんはエネルギーに満ちあふれていた。



はらだ あきこ 猫好き。保護猫活動にも力を入れている。瀬高町長田。【みやまにひとこと】みやま市に住んで、仕事をして50年。私の生きた証が全て集まっている宝箱です。昔も今も、これからも、みやま市ラブです。【座右の銘】ほどほどに、適当に

みやま文芸

真清水俳句会

ゆつくりと白地を染める 醉芙蓉 紙田 幻草
面影の寄りては消ゆる 寺の秋 榊島美代子
生き方を大きく変へる 盆の月 平井 和子
萩のみちたどれば古き如來道 宮地 末子
本を読む二人の背には秋の日が 森田 蓉子
夕月や神のほどよき情あり 梅野 博山

清水句会

水草の流れ狭めしあめんぼう 綿貫 惇
時鳥峽の暮しに加はりぬ 田尻カツ子
合歓咲いて苑の順路の歩の軽し 綿貫 淑子
緑蔭に風のささやき聞ひてをり 古賀 麗子
花合歓に人は寡黙となりにけり 岩屋 清美
緑蔭の風に長居をしてをりし 壇 篤子
あるなしのかすかな匂ひ合歓の花 猿渡 洋子

※俳句・短歌は市内の団体から提供いただいたものを順次掲載しています。